

学校に関すること

○「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」 → 学校図書館を授業で活用

学校司書の大切な仕事は、先生の授業をサポートすること。先生が学校図書館で授業をすれば、子どもたちは「読む」こと（＝読書センター）、「調べる」こと（＝情報センター）、主体的・対話的に「学ぶ」こと（＝学習センター）ができる。学校図書館を活用して行った授業を校種・教科別にデータベース化し、学校図書館を活用した授業の可視化を目指した。

学校図書館を授業で活用することの最大の利点は、すべての児童・生徒が様々な情報に触れる機会を持つこと。自分からは手を出さなかった本を、実際に手にとることで、それまで関心のなかった分野への好奇心が目覚めることもある。図書館を日常的に使うことで、読むことのハードルが下がり、知的探求の楽しさを知り、視野を広げることができる。

○学校図書館を活用した授業の実践について → 学校図書館を授業で活用

（新しい時代の学校教育では読書・学校図書館活用が重要）

2020年から順次、新学習指導要領が完全実施となる。「主体的・対話的・深い学び」を授業改善の指針にあげられている。この指針に従い、新たな小・中・高等学校教育が展開していく。子どもが関心を持つような主題を取り上げ、活動的・協働的な学習活動を位置づける事により、能動的な学びの姿勢を醸成し、学び方を自覚して深く学んでいくことを目指し、新たな時代に必要な資質能力を育てる事に貢献する。

学習指導要領総則には、何が起こるか分からない時代で生きるために必要とされる資質能力育成のための中核能力として、①言語能力②情報活用能力③問題発見・解決能力があげられている。この三つの能力の基盤になるのは①の言語能力である。基盤となる言語能力を育てつつ、言語能力の発揮が前提となる情報活用能力や問題発見・解決能力が育てられるように教育課程を編成するには、読書を勧め、読書の習慣を形成し、学校図書館を活用して読書活動・探究活動を位置づけた学習を展開することが鍵となる

（学校図書館を活用し読書活動・探究活動を位置づけた学習を展開する）

①読書活動を位置づける

本が読めるようになると、教師は安心して読書指導の手を緩めてしまうことが多い。しかし、より広く、そして深く読めるようになっていくためには常に働きかけが必要である。その一つとして、読書活動を学習活動に位置づけ、子どもの読書興味を強め、広げ続けていくことが必要

教育課程に読書活動・探究活動が位置づけられ、実践されることが必要である。

学校図書館長として校長のリーダーシップ発揮の元、全教職員が協力して学校図書館を活用した読書習慣の形成と探究的な学習の実施に取り組むことが重要。

○探究的な学習を支える読書指導の充実に向けて → 小学校・中学校での朝読書実施

小学校では読み聞かせ、中学校では朝の10分間読書、高等学校では書評合戦(いわゆる「ビブリオバトル」)が中心に行われている。

娯楽的な読書を中心に読書習慣を身に着けることを目的にしているが、読書活動の質的転換とともに、実社会・実生活に生きて働く資質・能力の育成を視野に入れた読書指導も模索すべき。

生徒が本に関する情報を入手できる機会を増やし、生徒自らが本を選べるように働きかけていくことが大切。公共図書館では、ヤング・アダルトのコーナーを設けることも必要。

高校生は、話題になったベストセラーや映像化された本を読む傾向がみられる。中学生にも同様の傾向がみられる。そのこと自体を否定するわけではないが、ベストセラーや映像化された本ばかりではなく、様々な本との出会いが実現できるように、学校図書館の工夫はもとより、公共図書館内にも高校向けのコーナーを設けるなどの取り組みが欠かせない。

(探究的な学習における読書を指導・支援する)

次期学習指導要領には、特に高等学校において、探究的な学習の重視が盛り込まれた

(学校図書館と公共図書館の連携を図る)

次期学習指導要領では、社会に開かれた教育課程の実現が示されている。学校教育にも社会教育の視点、すなわち生涯学習の視点が欠かせない。

社会全体での読書支援を通して、関係機関がゆるやかに連帯したり連携したりし、<未来に生きる子どもたち>をみんなで育てていくことが求められている。

読書を通して、社会の多様性を考え、実現していくことは、大人たちと子どもたち双方にとって、大切な視点ではないか。

○「味見読書」で自分自身の「名作」の発見を → 学校図書館を授業で活用

どのように読書好きな子どもが育ち、どんな環境だと本嫌いになってしまうのか。子どもの読書について共通して見られる傾向がある。それは、本好きな子どもが大勢育っている学級と、本を読みたがらない子が圧倒的に多い学級がある。学年が進むにつれてそれは顕著になる。

<「味見読書」誕生のきっかけ>

普段本を読まない生徒たちに理由を聞くと、その多くは「読まず嫌い」であることがわかってきた。世の中でどんなに評判が高い本でも、それを無理に（最後まで）読むことを強要したのでは、更に本が嫌いになってしまう。また、「何でもいい。」とか「好きな本でいい。」と言って放っておいてもいけない。本に接する機会の少ない生徒たちほど、自分自身でも自分の「好きな本」が分からないことが多く、自力で自分に相応しい本を探せないからだ。

生徒たち一人一人が、彼ら自身にとっての「名作」に巡り会い、それに親しむことを最大の目標にして「味見読書」を開発した。これは、「最後まで読まなくてよい、つまらなければ他の本に移ってよい。」と断って、生徒たちに見合いそうな本（後に、「課題図書」と称する）を十数冊薦めてみると、終わりまで読まなくてよいと知った生徒たちは、安心して読書をするようになった、という経緯から誕生した読書指導方法である。

授業中に少しのページだけでも順繰り全ての本を読むことができるようにする。受け持ちの全クラスにこうした時間を設けているから、一人が1冊に関われる時間は5分くらい。食べ物に喩えれば「味見」みたいなもので、いつの頃からか、生徒たちから「味見読書」と呼ばれるようになった。授業中に少しのページだけでも順繰り全ての本を読むことができるようにする。受け持ちの全クラスにこうした時間を設けているから、一人が1冊に関われる時間は5分くらいのものである。食べ物に喩えれば「味見」みたいなものだったので、いつの頃からか、生徒たちから「味見読書」と呼ばれるようになった。

○小学校での読み聞かせで大切なこと → **読み聞かせの実施**

子供たちはお話の世界が大好き。お話の中で、主人公たちと一緒に冒険を楽しんだり、空想の世界を広げたりすることで、子供たちの心が成長し、本の世界の楽しさを知ることができる。でも、子供たちは、自分でおもしろい本を探すにはまだ経験が足りない。

読み聞かせをする大人たちは、聞き手の子供たちにぴったりの本を探すことが大切。学校での読み聞かせは、お楽しみ会の時間ではない。読み聞かせの時間を積み重ねる中で、聞き手全員が心から本を楽しみながら、それぞれの子供たちが力を伸ばす時間であってほしい。そのため、読む本は選ばれた本でなければならない。子供の心に添って、子供の視点で作られ、子供の心を満たしてくれる本である。

子供がその本と出合ったことで、心からの満足感を覚え、本の世界を信頼し、その後の読書につながるような本を選んでほしい。子供が満足する読み聞かせは、その後の読書につながる。

いい本をたくさん読んでもらう経験を積み重ねるうちに、「本は面白い」という本への信頼ができ、自分でも本を読むようになっていく。

○学校でこそ、本好きな子を育てたい → **学校図書館の積極的活用**

本好きな子どもが大勢育っている学級と、本を読みたがらない子が圧倒的に多い学級がある。学年が進むにつれてそれは顕著になっている。

本好きな子を育てている学級担任の先生がどのような指導をしているのか、本嫌いな子が育つ学級との違いの例。一人の先生がこの全部をとっているのではない。

- ① 担任が「読みきかせ」や「聞く読書(読む読書に対して)」を折々している。
- ② 先生が子どもの本を読んでいる。
- ③ 朝読書のときには担任も読書をしている。
- ④ 子どもたちに「図書館に行く」「本を借りる」ことをいつも促し習慣化させている。
- ⑤ 授業などで、よく本についての話題を出す。本の紹介もする。
- ⑥ 読書単元では努めて関連図書や同じ作者の本などの並行読書をさせている。
- ⑦ 本を読む時間をできるだけ確保している。朝読書・隙間時間の読書・家庭読書など読む機会を意識的につくり促している。
- ⑧ 調べ学習などで図書館を活用し、本を利用した学習を工夫して取り組んでいる。
- ⑨ 不読傾向の子どもに声をかけ、本に親しめるように個別に働きかけている。
- ⑩ 子どもが読んでいる本に関心を持ち、読書する子を褒めることがある。

ここに上げた例は、そんなに難しい特別のことをしている訳ではなく、ごく当たり前のこと。本嫌いな子が育っている学級の例は。

- ① 担任が本を読むことは学習以外のことだと考え、読みきかせなどはしない。
- ② 先生が子どもの本を読まない。読書が好きでないか読書習慣がない。読む暇がない。読書をあまり大事とっていない。
- ③ 子どもたちが図書館に行ったり本を借りたりすることを積極的に薦めない。借りる時間もあまり保障しない。(担任が望んでいないことに子どもは敏感)
- ④ 授業に図書館をめったに活用しない。図書館に親しむ指導が無いかあるいは少ない。

子どもたちを図書館から遠ざけ、本に親しむ働きかけをしないだけで子どもたちは簡単に読書が苦手な子どもに育つことが見えてきた。

新学習指導要領では、言語活動の重視という観点で全ての教科で図書館を活用し、図書の利用が重要になっている。教育課程の中に読書教育が位置づけられた。

読書は、指導することによって自立した読み手が育つ。放置しておいては、本離れを避けることはできない。読書は教育として行われる必要がある。本好きな子に育つかどうかは先生次第と言っても過言ではない。

「読みきかせ」の例を上げれば、担任の先生が読みきかせをすることで一層インパクトが強く、子どもと本の世界を共有するいい関係が生まれる。学級づくりにも効果的。特別支援を要する子どもたちに、授業の始めに読みきかせをすると集中力が促されスムーズに学習に入れるし学習力が高まると一石二鳥どころか三鳥の「読書効果」を活かしている先生もいる。本は優れた教材。読みきかせは、効果抜群の指導手法。こんなすごい「読みきかせ」を保護者や地域の方に任せておくだけでなく、教師自身が教育活動の一つとして取り組んでほしいわけがまだまだある。

今こそ、学校で教育の一貫として本好きな子どもを育てる必要がある。しかし、子どもの本に馴染まない先生もいるかもしれない。読書指導を図書館担当者が請け負って完結するのではなく、司書教諭、学校司書、図書館担当教諭による教員サポート・読書指南が大切。教育課程と図書館活用を結びつけるための本の情報を伝えるなど全教師への「読書指南」こそ、本好きな子どもを育てるキーポイント。

特別な支援を必要とする子どもに関すること

○ディスレクシアー読みが困難でも読書は楽しい → 学校での読み聞かせ・朝読書

読み書きの困難を覚えるディスレクシア（知的に問題が無く、聴覚・視覚の知覚的機能は正常なのに、読み書きに関しては特長の有るつまずきや学習の困難を示す症状）の子供は、世界で文字を使用している文化の国々では人口の約 10%。一生治るものではなく、教育的には学習障害というよりも「学習方法の違い」ととらえる方が適切。その困難さは人によってまちまちで、主に読みのスピード、正確さと流暢さで測ることができる。

ディスレクシアの程度は人によって違うが、全然読めないわけではない。多くの場合は音読が不得意だが、自分のペースで読めば読書は得意になることも多くある。読書が苦手にならないためには強要しないこと。

○本の世界は楽しい～発達障害のある子供と本とのかかわり方～ → 学校での読み聞かせ

小さい頃から本に親しむことは大切。

本を読むのに抵抗感が少ないタイプの多くは ASD（自閉症スペクトラム障害）タイプの子供たち。本を読み始めてもすぐに飽きて、お友達に話しかけたり教室をうろうろしたりするタイプの多くは ADHD（注意欠陥多動性障害）タイプの子供たち。

文字を読むことが苦手なタイプの多くは LD（学習障害）タイプの子供たち。

一人でじっと座って、静かに黙々と本を読むという一般的なイメージの読書ができるのは、ASD タイプの子供。本を読むのが好きな子が多く、文字がたくさんある本でも学童期前から読める子もいるが、物語系ではなく電車や虫の図鑑などに興味を持つ場合が多い。

LD タイプの子供には、年齢が高くても絵本の読み聞かせが有効です。彼らは文字を読むのが苦手なので、絵が内容理解のために大切。読み書き能力の育成には絵本から入るのがよいとされるもので、あいうえお順に文字を覚えるのが苦手な LD や飽きやすい ADHD タイプの子供たちに有効。LD や ADHD タイプの子供たちに有効なのは、ただ聞いているだけではなく、疑問や意見を自由にシェアし合うような進め方

ASD タイプの子は、登場人物の気持ちが分からないこともある。それでも OK という雰囲気であらかじめつくっておくことが大切なポイント。

多動な子供は、じっとしているのが苦手。途中みんなと一緒に動いたり、ストレッチしたり、歌ったりするのもよい。

基本的なルールを貼り出し、事前に確認しておくが良い。

○発達障害のある子供への読書支援 → 学校での読み聞かせ

大切なことは「読むこと」や「本」を嫌いにさせないこと。社会で生きていくためには、学習にも生活にも文字情報は欠かせない。新しい情報を与えてくれたり、未知の世界について知らせてくれたり、本はいろんな事を教えてくれる。

子ども全般に関すること

○本を開いて、未来も開く → 家読（うちどく）の日の定着

「読書より面白いことがある」から本をほとんど読まない子供や大人が多くいることも確か。

読書の恵みというのは実に多様。例を挙げれば、①子供の語彙が大幅に増える。②言葉と読解力が発達する。③学力が高まる。④想像力と集中力が鍛えられる。⑤性格が人の気持ちを考えるように形成される。⑥感情や感性が発達する。⑦社会性が発達する。⑧人の気持ちが読める共感が成熟する。⑨文脈理解力が鍛えられる。⑩経験の拡張ができる。⑪悩みを解消する力が身につく。⑫進路のヒントが得られる。⑬親などとの絆が深まる。⑭時間を楽しく過ごせるなどがある。

語彙と表現力を増やすには、読書が極めて効果的である。特に、子供のころの読書は言葉の発達に非常に重要である。日常会話やテレビで出会う単語と表現はかなり限られているが、本を読むとその幅が飛躍的に増える。

物語をたくさん読む人は登場する人の身になって、様々な感情を疑似的に経験し、人の心の作用をよく理解できるようになる。自分の生活で体験できないことを、本を通して体験できる。それは、疑似体験であっても、脳の処理の中で本物の体験と実質的にあまり変わらないからである。人情、感性、感受性、社会性、協調性、人の動機と気持ちを読み取る力などは、体験の種類と数で高まるのであれば、読書は近道である。

本を読む子供を育てるには本のある環境を作ることである。子供たちが本に興味を持つには、大人のよい見本が必要。本のない家では読書をしたくてもできない。本を読まない親に「読みなさい」といわれても、説得力があまりない。自分が楽しく読んでいる姿を子供に見せることが最も効果的。

小さい子供は素直に本が好きだが、高学年や中学生になると友達に見せる姿が気になるので、読むことが格好いいと思わなければいけない。しかし、友達が楽しくやっていることにひかれる心理を活かせば、読書を流行させることができる。その効果を狙う「子ども司書制度」は子供同士で読書の楽しさを伝えるリーダーの養成を目指す。図書館の仕組みや司書の仕事、本の紹介法などをしっかり習った子供司書は得た資格を握り、自分の学校に戻って、読書の伝道師として活動する。

家や図書館で過ごした読書の時間は一生の財産になる。自由な読書は楽しければ、「勉強した」と感じないけれど、休み明けの授業や会社の会議で、「あ、それは分かる。図書館で読んだことがある」といえる自分が格好よく思える。

○読み聞かせは「心の脳」をはぐくむ → 家読（うちどく）の日の定着、読み聞かせの実施

読み聞かせの効果については、賢い子供に育てる知育的效果が強調されている。

実際に脳の活動を調べてみると、感情・情動にかかわる脳の領域が強く活動していた。

心の動きに関わる脳、「心の脳」と呼ぶことにし、読み聞かせは「心の脳」に働きかけていた。

読み聞かせには直接「心の脳」に働きかける何かがあって、その結果が笑顔となって現れる。これが読み聞かせの本質だと考えている。

読み聞かせは「心の脳」をはぐくみ、人としての土台を作る。

（「親子の絆づくり」としての読み聞かせ）

読み聞かせのもう一つの大きな効用は「親子の絆づくり」にある。読み聞かせの時間はそんなに長い時間ではないが、これほど濃密な親子の時間、子供をしっかり観察する時間は他にはない。読み聞かせを通じて、子供を見る習慣がついてくる。普段の生活の中でも子供をしっかりとお見すること

は、子どもの小さな変化に気づき、親をほめ上手にしてくれる。ほめられた子供は嬉しいと思い、子供の成長を発見してほめた親自身もうれしくなる。親と子どもの間の「ほめて・うれしい」「ほめられて・うれしい」はいい親子関係を作り出し、正のスパイラルとして働いて、「親子の絆」を作ることに繋がる。

○子供の本の読み方・楽しみ方 → 読み聞かせなど年齢に応じた各種取組み

私たち大人は、自分の固定観念に縛られず、子供特有の本の楽しみ方を子供から学ぶ。それでこそ子供に寄り添って、喜びを共有できるのだと思う。

「読みなさい」「調べなさい」と言う前に、大いに楽しみ、驚き、笑う。そこから読書への道が開けてくる。大人がすべきことは、年齢にあった面白い本と静かな読書環境を用意し、読み聞かせをしたり、本の楽しさを伝えたりすること。読んだ本のことであれこれ言わず、そっとしておく。そうやって過ごす自由な時間こそが子供独特の本との付き合い方や楽しみ方、時にはゆかいな勘違いを生みだし、やがて子供を本の世界の確かな住人にしてくれる。

大人は子供の読書に目に見える成果や意図を求めがち。読書から何か良きものを得ることは確かだが、本当の実りは、大地に雨がしみ込むようにゆっくりとやってくる。それも大人が意図したものでない、思いがけないところに実るのだと思う。

○乳幼児と絵本のたのしい出会いのために → 親子読み聞かせなどの実施

人生のはじめに、よい物語にたのしく出会うことは、子どもにとって一生の宝になる。

数人の乳児に向かって絵本を読み聞かせている場面を見て、おもしろいと思ったことがある。赤ちゃんたちがそろって、絵本という四角い“物”でなく、話しかけてくれる人の顔に注目している。身近な人と関係を築いていく基礎を育む、この大切な時期に、まずは、スマホなどから目を離し、しっかり子どもと視線を合わせて、心地よい声、響きのよいことば、リズムのあることばを、ともにたのしもう。そのために力を発揮するのが、わらべうた。

図書館で、親子で遊ぶわらべうたの会を始めてから、「わらべうたで遊んでいると、子どもがとても喜んで、機嫌よくなるので、子育てがたのしくなった」という、うれしい声も寄せられた。親子の関係がよいものになり、ことばが人と人をつなぐ快いものになると、自然に絵本にも関心が向く。

<何よりいいのは、読んでもらうこと>

子どもにできるだけ早く字を読むことを教え、幼いうちから自分で読ませようとする親をよく見かけるが、実は、ここで本嫌いになる子どもが多い。

読書には、「字」をひとつずつ読めることより、ことばの響きや物語をたのしめることの方が、ずっと重要。物語のたのしさを味わえるようになるのにいちばんよいのは、何ととっても読んでもらうこと。まずは、好きなだけ読んでもらって、耳からの読書をたのしもう。そのたのしさが原動力となり、自然にどんどん自分で読むようになっていく。

大好きな人から読んでもらった思い出は、ずっと子どもの心に生き続ける。そして、ただ聞いているだけのように見えて、子どもの心の中では、大きな精神活動がおこなわれている。

心に響いたのしさがなければ、子どもは本から離れていく。子どもたちに長い間読み継がれてきた絵本には、子どもを本の世界に誘う力がある。

○科学の本の読み聞かせのすすめ → 読み聞かせの実施

<子どもの体験を増やし、体験を本につなげる>

みんなで同じ体験をしてその後に読み聞かせをしようと考えた。

関連する実験や工作を行ってから本を読むようにしたところ、子どもたちの反応が大きく変わった。たった今自分が見聞きし考えたことがそのまま言葉や絵となって読み手から伝えられるので、子どもたち一人ひとりが本に見入り、本の言葉に応えるかのようにじっくりと内容を聞いてくれるようになった。

科学の本から科学の本へとつなげることで子どもたちの新たな「？」が「！」に変わり、さらに芽が大きく育つことを願っている。

子どもの成長は早く、知識や体験が増えると同じ本でも異なった興味や関心を示す。

○私の心を惹きつけてやまない図書館 → 図書館でのイベント実施、本の展示など

「ぬいぐるみお泊まり会」が全国で広まっている。子どもたちからぬいぐるみを預かり、夜の図書館を楽しむ様子を撮影して、ぬいぐるみを戻すときにその写真をプレゼントするという企画で、子どもにとっては自分の分身が図書館にお泊りしたかのよう。

もう一つの人気ある図書館企画が「本の福袋」。テーマに沿った本数冊を袋に入れて中身が見えないようにし、利用者は袋に書かれたキーワードやヒントをもとに袋を選んで借りる。中身は開けてのお楽しみ。子ども向けの福袋は、対象年齢がわかるようにしていることが多い。自分で本を選んでいると、好きなジャンルに偏りがちだが、こうした企画を通じて未知の本と出会う。

最後に紹介したいのが、子どもの行動力から生まれた「ダイタンの読書検定」。世田谷区立代田図書館が改築工事のため長期休館している間の仮事務所で行っている企画で、物語を読めば解ける三択問題を、もともとは図書館員が作って配布していた。すると、常連利用者の少年が自主的に問題を作り図書館にもってきてくれて、今では利用者の作った問題を配布する企画へと発展している。

図書館の楽しさの根底は、家とは比べものにならないほどたくさんの本を手にとって読めるという、その空間自体にある。私が図書館を回るなかで見ると好きな光景の一つに、小さな図書室の限られたテーブルで、子どもも大人も一緒になってそれぞれの本に没頭している姿がある。本の世界に浸る楽しさのもとでは、子どもも大人も平等だと感じられ、これこそが本の力だと思う。

小さな子どもが親の力を借りずに一人で本を棚に戻した後、「一人でできたよ」という誇らしげな顔で私に笑いかけてくれた。子どもたちは、図書館を通じて、公共の決まりごとを学んでいく。

読書だけでなく、本の世界に囲まれた空間や、皆と一緒に読書体験をも楽しめる図書館は、私の心を惹きつけてやまない。

○家族ふれあい読書「家読（うちどく）」運動の効用 → 朝読書、家読（うちどく）の日の定着

今では全国の学校で日常的な活動になった「朝の読書」。授業前の10分間、生徒と教師の全員が一斉に本を読む。読む本は自由、感想文や記録は求めないシンプルな読書法が、子どもたちに受け入れられた。「朝の読書」は1988年に千葉県私立女子高校で社会科を教える林公教諭の提案と、体育担当の大塚笑子教諭の実践で誕生した。夢や希望を持たず心の荒みが進む中で、心の豊かさを育む実践を求めた結果、辿りついたのが一日10分間の読書だった。

一日10分の読書でも毎日続けることで、子どもたちには様々な効果が現れた。特に集中力と読解力が身につくことで学力向上に成果をあげた学校は多い。「全国学力テスト」の結果を統計分析した

広島大学大学院教育学研究科山崎博敏教授は、「朝の読書の時間を設けている小・中学校は、設けていない学校より国語・算数・数学ともに正答率が高い」「読書が好きな児童は正答率が高い」「家や図書館で1日30分以上読書する児童の正答率が高い」「テレビやインターネットをする時間が短い児童の正答率が高い」ということを立証した。特に注目したのは、「**親と学校での出来事について話をする児童生徒の学力は高い**」というケース。「朝の読書全国交流会」でも、「朝の読書で読んだ本を親と話す生徒の生活態度は良好で学力も高い」という報告が多かったからだ。

本が大好きな小学6年生6人をお願いして、「朝の読書」の家庭版はどうすればできるのかを語り合ってもらった。6人の子どもたちは「**最近の大人は本を読まないから**」と前置きし、**大人を巻き込む素晴らしい家庭読書を考えてくれた**。①家族で同じ本を読む②読んだ本で話す③感想ノートをつくる④自分のペースで読む⑤家庭文庫をつくる、5つの約束ごとになった。運動名は「家読」と書いて「うちどく」と読むことにした。この第1回家読子ども会議を12月20日付読売新聞全国版朝刊（広告特集）で社会へ発表した。家読運動の産声である。新聞効果は大きかった。「このような家族のコミュニケーションの取り方を初めて知った」「こどもと同じ本を読んで感想を話すことで気持ちが通じ合った」「家読が広がれば問題を起こす子どもはいなくなる」等々

家読は難しく考えることはない。素材は「絵本」を家族全員でページを割り当てて音読するだけでいい。「絵本」には学校の教科書では学べない人間として生きていくための豊かな心を醸成するすべてのテーマが盛り込まれている。その絵本をみんなで手分けして読めばなんとなく感想が口をほとばしる。それがコミュニケーションの始まりである。絵本は幼児からお年寄りまで年代を問わないで共読できる。

家読はコミュニケーションを図る場であり、子どもたちの思いや素晴らしさを知り、発見する場でもあり、私たち親の考えを子どもたちに伝えることのできる大切な時間だと思う。

○子ども司書 もう一つの目標 → **一日図書館員など各種イベントの実施**

子ども司書制度は、子ども読書の街づくりを進める大きな柱として2009年に矢祭町で考案された制度であるが、現在では、全国の自治体や図書館等に急速に普及している。子ども司書制度は、対象者を小学4年生から6年生とし、もったいない図書館と小学校が連携して講座を担当し、一定の講座と研修を修了し、単位を取得した児童に「子ども司書認定証」が町長から贈られる。**子ども司書は、友達や学校、家庭や地域で読書の楽しさを伝えるリーダーになってもらうのが目的**である。

1期生・2期生は、**図書館サポーターとしても活躍の場を広げ、町内各集会所にあるもったいない文庫で読み語りもする。**

「心の教育」という言葉があるが、人間には本来やさしい気持ちや、弱い人を助けていこうという性質があり、そういう価値観を身につける時期に、その機会を逃してしまうと成長してからでは中々身につかないとも言われている。**社会の中で自分の存在を意識する小学校2年生くらいの時期から読書に興味を持たせ、4年生頃から子ども司書を通してたくさんの書物に触れることが重要である。**読書する子どもは理解度が高いと裏付けられたのを契機に読解力を養成する学校が増えてきている。**基本的な知識を中心にした読解力教育はもちろん重要なことであるが、成績向上のための読書であってはならない。**子ども司書育成のもう一つの教育目的は、人間の基本となる**コミュニケーション力を養うこと**である。それが生きる力につながっていくことを願っている。